

155 名古屋大学と空襲① — 鶴舞キャンパス —

今年には第2次世界大戦後70年にあたりますが、それは名古屋大学（当時は名古屋帝国大学）が空襲をうけてから70年ということでもあります。そして、70年前のこの3月に空襲に遭ったのが鶴舞の医学部でした。

名古屋へのアメリカ軍による本格的な空襲は、1944(昭和19)年12月から航空機生産工場を目標に始まり、やがて市街地への無差別爆撃が行われるようになります。

名古屋への空襲が始まると、名帝大の疎開が検討されるようになります。工学部と理学部は、各地への分散疎開を進めることが方針となりましたが、医学部にはそれができない事情がありました。1つには病院があったからです。すなわち、空襲で負傷した市民の治療のため、名帝大医学部附属医院が疎開するわけにはいきませんでした。またもう1つには、医学部の場合、研究と臨床、あるいは諸学科の施設を別々の場所に置いては、研究も教育もほとんどできないという事情がありました。

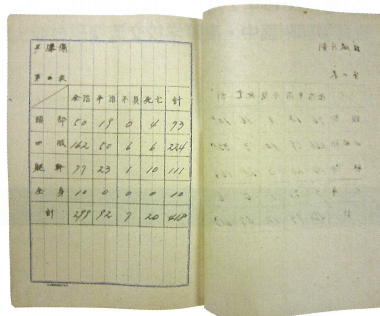
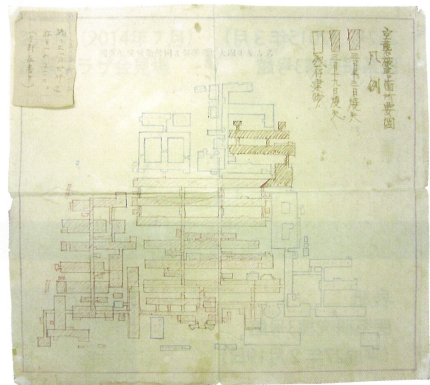
名帝大の鶴舞地区への空襲は、3月12日、19日、25日の3回行われました。12日と19日は、名古屋全体への大空襲の日でもあります。12日の空襲では、午前1時20分に目録で500発以上の小型焼夷弾が構内に投下され、落下と同時に建物の内部は「火の林」のような状況となり、さらに強風が吹いていたため初期防火は手の施しようがなく、次々に校舎へ延焼していきました。

3回の空襲により、校舎は焼失率97%と文字通り全焼、病院施設も半分を焼失したのです。ただ入院患者は、空襲警報発令と同時に運動場や鶴舞公園の防空壕に迅速に避難したため、死傷者は出なかったようです。

また、3月の大空襲により、市内の多くの救護病院が焼失したため、医学部附属医院の救護病院としての役割がいよいよ高まってきました。多くの患者を受け入れることはもちろん、行政の要請を受けて救護班が各地へ派遣され、めざましい働きをしました。



1	2	4
3	5	



- 1 空襲前の名帝大医学部。
- 2 空襲直後の名帝大医学部。写真中央の図書館など、コンクリート造りの建物は焼け残っている。
- 3 空襲被害箇所要図（附属図書館医学部分館医学部史料室所蔵）。3月12日（史料では13日と誤記）と19日の空襲で焼失した建物に濃い色が付いている。25日の空襲は焼夷弾ではなく爆弾が投下され、建物の窓ガラスに大きな被害があった。
- 4 鶴舞への空襲により被災した医学部の図書（附属図書館医学部分館医学部史料室所蔵）。鶴舞の図書館は無事であったが、各教室に置かれていた図書は大半が焼失した。

5 名古屋帝国大学医学部附属医院救護病院救護班『空襲二因外傷患者ノ治療成績：昭和20年3月19日以降終戦マデ』（附属図書館医学部分館医学部史料室所蔵）。負傷の種類別に分類されている。